



写真-1 円山川下流に浮かぶ簸礪島（平成27年10月撮影）

■ 但馬に多い国造り伝説

写真-1 は、JR 山陰本線・玄武洞駅付近の山腹から円山川とそこに浮かぶ中州・簸礪（ひのそ）島を撮ったものです。前方に見える橋は結和橋（ゆうわばし：橋長248.5m、幅員3.6m、8径間钣桁橋）で、幅員狭小のため中央部にすれ違うスペースが設けられています。この結和橋から5km余り下ると日本海です。

この円山川下流域には、太古の昔、「縄文海進」といって地球温暖化の影響で海水準（平均的な海面の高さ）が上昇したことで広大な湖が広がっていましたが、この話を基にして、大屋川お走り祭りの由来となった「瀬戸開きのお礼参り」などの国造り伝説が古くから語り継がれてきています。

■ 「粟鹿山」の地名伝説

遠い昔、但馬の山東や和田山（いずれも現・朝来市）の辺りは、向こう岸が見えないほど広い湖でした。粟鹿山（あわがやま：写真-2）やまわりの高い山々も、その湖の上に頭を出した島でした。人々は、粟鹿山のことを「大山」と呼んでいたそうです。

ある日のこと、火遠理命（ほのりのみこと）という神様が、天から大山の頂に降りてきました。そして山頂から周囲を見回して、「この広い湖の水を海へ流し出して広い土地を造ったら、人々が住みやすくなるだろう」と考えました。

火遠理命は、高天原（たかまがはら）から下ってきた瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）が、地上で木花開耶姫（このはなさくやひめ）と結婚して生まれた3人の子の中の1人（三男）で、山幸彦（やまさちひこ）とも呼ばれ、神武天皇の祖父にあたります。



写真-2 粟鹿山（道の駅「但馬のまほろば」から撮影）

さて、火遠理命は大山から下りると、水を堰き止めていた山を蹴り崩しました。水はごうごうと音を立てて日本海へと流れ出し、その跡に広い土地ができました。しかし、泥がなかなか乾かないので、そこに大きなお地藏様を埋め込んで土地を固めたそうです（『但馬六十六地藏』に通じる話です）。

それからというもの、この土地には多くの人々が住み着き、あちこちに豊かな村ができました。人々は、火遠理命が周囲を見渡した大山を見国岳と呼んで毎日拝んでおりました。

ある日のこと、火遠理命が見国岳で休んでいると、1頭の美しい牝鹿が3本の粟の穂を角の上に載せてやって来てうやうやしく捧げました。これが粟鹿山の名の由来だそうです。

その後、人々は山麓に粟鹿神社を建てて、火遠理命をお祀りするようになったとか。



写真-3 粟鹿神社

■ 但馬五社明神の国造り

大昔、まだ豊岡の辺りが一面泥の海だった頃、人々は十分な土地がなくて、住むのにも耕すのにも困っていました。この土地を治める五柱の神様※¹は、その様子を見て何とかしてもっと広く住みよい所にしたいと考え、床尾山（とのおさん）に登って、泥の海を見渡してみると、来日口（くるひぐち）の辺りにものすごく大きな岩があって水を堰き止めています。「あの大きな岩を切り開けば、泥水は海へ流れるにちがいない。そうすれば、もっと広い土地ができるだろう。泥の海がなくなれば、たくさんの人が安心して暮らせる。」

神様たちが早速大岩を切り開くと、泥海の水はごうごうと音を立てて海の方へ流れ始めました。ところが、水が少なくなると泥海の真ん中から突然恐ろしい大蛇が頭を出して、うなり声を上げながら切り開かれた岩へと泳ぎ始めました。そして、来日口に横たわって水の流れを堰き止めてしまいました。

神様たちは「この大蛇は、泥の海の主にちがいない。これを追い払わねば、いつまでたっても水はなくなる」と考え、大蛇を追い払おうとします。しかし、大蛇はすぐ泥にもぐって逃げてしまい、あきらめて引き上げるとまた現れて水を堰き止めてしまいます。神様たちはたいそう怒り、隙を見て大蛇に飛びかかって岸に引きずり上げました。そして頭と尻尾をつかんで、真っ二つに引きちぎろうとしますが、大蛇もそうはさせじと大暴れ、太くて長い体を神様たちに巻き付けて絞め殺そうとします。五柱の神様と大蛇は組んず解れつの大格闘、大蛇が転がるたびに地面は地震のように揺れますが、神様たちが力を合わせて死にものぐるいで闘ったので、大蛇もしだいに疲れてきました。そこで神様たちが、大蛇の頭と尻尾にとびかかって、えいっと力をこめて引っ張ると、さしもの大蛇も真っ二つになってしまいました。

こうして、泥の海の水は全部日本海へと流れ出し、跡には豊かな広い土地が残りました。人々はたいへん喜び、それからは安心して暮らせるようになりました。



写真-4 網巻神社



写真-5 小田井縣神社



写真-6 養父神社

※1 五柱の神様：但馬国を円山川に沿って南北に鎮座する絹巻（きぬまき）神社・小田井縣（おだいあがた）神社・出石神社・養父（やぶ）神社・粟鹿神社の五社（図-1 参照）を総称して「但馬五社明神」と呼んでいる（「柱」は神様を数えるのに用いる助数詞）。

■ 天日槍の国開き伝説

国土開発の祖神・天日槍（あめのひぼこ）をご祭神とする但馬国一宮・出石神社の『出石神社由緒略記』には、天日槍が兵庫の穀倉といわれる但馬耕地の基礎を築かれた経緯が以下のように記されています。

天日槍は新羅（しらぎ）の王子でありましたが、東方の国に聖皇（ひじり）の君いますと聞き、その徳を慕って自分の国を弟の知古（ちこ）に授けて一族を率い、日本海の荒波を越え、垂仁天皇三年春三月、播磨国宍粟邑（しさをむら：現・宍粟市）に上陸、日本の国に帰化し、天皇より播磨国宍粟邑および淡路の井浅邑（いでさむら）の二邑を賜りましたが、天日槍は我が心にかなう地を賜えと願って勅許になり、遍歴の旅に出て（中略）但馬に入り定住されました。

幾辛酸を経てようやくたどり着かれた但馬の国も未だ開けず、洪水逆行して民の居るべき平地もなく、一面の泥海は蛇竜（さざり）の住み家で、人民に危害を加え、五穀を植える田畑も無い不毛の地でありました。天日槍は、この未開の地を開いて産業を興し民万人を安んじようと、ついにここに永住の決心をされ、国土開発に着手されました。



写真-7 出石神社

この国は地殻変動によって円山川河口付近が隆起したため、周囲の山々より流れ出する川水ははけ口が無く、ために泥、砂、水は国中に充満して一大泥海となっていました。天日槍は河口の岩石を切り開くことによって泥水を海中に放ち、耕地を開き得ることを察し、ここに一大開削工事を起こされました。

鑿（のみ）などの鉄器の製作には出石の南端で丹波国境の床ノ尾（とこのお）と称する但馬五山の一つに数えられる山脈中鉄鉦山（かなとこやま）より砂鉄を採り、山麓の畑区（現・豊岡市但東町）で工具を鍛造して、また人夫を徴し、従え来った工人を督励して自ら指揮に当たり、幾歳月を要してついに岩山を開削して泥水を海中に放ち、砂を流して平野を現出、農を興し、杞柳の栽培を教え、須恵器を製して殖産に多大の功績を遺しました。



図-2 「瀬戸岩引きの図」

■ 国造り伝説の基となった縄文海進

このように、但馬地方には、「粟鹿山の地名伝説」や「但馬五社明神の国造り伝説」、「天日槍の国開き伝説」など国造りにまつわる伝説が古くから語り継がれてきています。これらの伝説に共通しているのは、「円山川下流域はかつて湖だったが、神様（たち）が水を海へ流し出して土地を造った」という点です。この「かつて湖だった」というくだりは、縄文時代に起きた温暖化に伴う海水準上昇（縄文海進）を考えると必ずしも荒唐無稽な話ではありません。

縄文時代前期（およそ6千年前）は、現代よりもずっと暖かい時代で、海水準は現在よりも数 m 高く、豊岡市中谷や長谷で見つかった縄文時代の貝塚から、かつて豊岡盆地の奥深くまで汽水湖が入り込んでいたことが確認されています。

中谷貝塚は、円山川の東 500m ほどの所にある縄文時代中期（およそ5千年前）～晩期（およそ3千年前）の貝塚ですが、現在の海岸線からは十数 km 離れています。長谷貝塚は更に内陸寄りにある縄文時代後期（およそ4千年前）の貝塚です。

実際、円山川右支川の出石川周辺を発掘調査してみると、砂と泥が交互に堆積した軟弱な地層が地下深くまで続いています。「神様たちが湖の水を海に流し出した」という伝説は、ひょっとするとこういった太古の記憶を伝えているのかもしれません。

■ 豊岡盆地の地盤は厚く軟弱な粘土層

現在、円山川下流の豊岡市城崎町楽々浦～同市城崎町湯島において、主要地方道豊岡竹野線城崎大橋架替事業が進められています。昭和 31（1956）年に架けられた現橋梁（橋長 237.5m、幅員 4.5m）は、架橋後約 70 年が経過し老朽化が進んでおり、幅員も狭小かつ大型車の通行が制限されていて、加えて橋脚数が 22 基と多く円山川の河積を阻害していることから架け替えられるものです。

新橋は、PC6 径間連続箱桁橋（橋台 2 基、橋脚 5 基）で、橋長 561.5m、幅員 11.25m、現橋の下流約 1km の地点に架橋中です。本事業は、平成 17（2005）年度に事業着手し、平成 28（2016）年度に工事を開始しています。



写真-8 現・城崎大橋（右岸から撮影）



写真-9 完成間近の新・城崎大橋（令和6年11月右岸から撮影）

ここで注目したいのは、橋脚基礎の深さです。円山川下流部の地盤は軟弱な粘土層が厚く堆積していて、 $\phi 800\text{mm}$ の鋼管矢板井筒基礎が基礎地盤となる砂礫層や基盤岩まで最長で 54m（図-3 参照）も打ち込まれています。

縄文時代、この辺りが湖だった頃、洪水の度ごとに運ばれてきた細粒分や微粒分が沈降・堆積して分厚く軟弱な粘土層が形成されていて、「豊岡の町は、まるで豆腐の上に住んでいるようなもの」といわれる所以です。

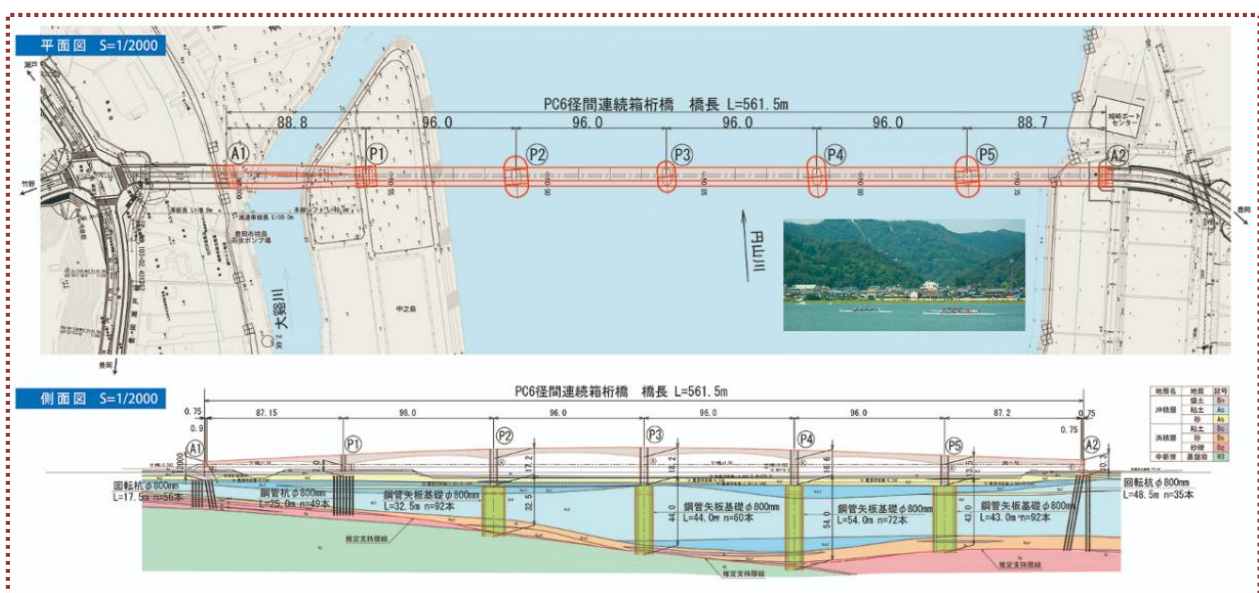


図-3 新・城崎大橋の計画平面図・側面図（豊岡土木事務所提供）

※ 城崎大橋は、令和 7（2025）年 5 月 31 日に開通しています。

■ モノローグ

今回は、但馬に伝わる国造り伝説をいくつか紹介しましたが、そもそも「伝説」とは何なのか。古くから語り継がれてきたもの、事実と信じられ語り伝えられてきたものではありませんが、すべてが事実とは到底思えません。

福崎町出身の民俗学者・柳田國男は、「伝承文芸の収集例のうち昔話でないものを『伝説』とする」と定義されていますが、では「昔話」とは何ぞや。昔話は、語られる人物・時・場所が不特定で、事実かどうかわからない（恐らく事実ではない）ということのようで、一方「伝説」は、語られる人物・時・場所がある程度特定されていて、少しは事実かもしれない（少しは信じてほしい）ということのようです。

ただ、どこまでが事実でどこまでがフィクションなのかが判然としないところが悩ましい。

新温泉町海上に伝わる「大蛇と洪水の伝説」のように、千年以上前に起きた崩壊跡が今なお明瞭に残っていると伝説の信憑性が俄然高くなります。今回の国造り伝説では、「縄文海進」が伝説の信憑性を高める太古の記憶の一つなのかも。

なお、右の写真-10 は完成後の城崎大橋です。



写真-10 完成した城崎大橋（令和8年7月撮影）

フヨウ（芙蓉）

アオイ科フヨウ属の落葉低木。「芙蓉」はハスの美称でもあることから、特に区別する際にはフヨウを「木芙蓉（もくふよう）」、ハスを「水芙蓉（すいふよう）」と呼ぶ。7～10月初めにかけてピンクや白で直径10～15cm 程度の花をつける。朝咲いて夕方にはしぼむ一日花で、長期間にわたって毎日次々と開花する。花は他のフヨウ属と同様な形態で、花弁は5枚で回旋し椀状に広がる。先端で円筒状に散開するおしべは根元では筒状に癒合しており、その中心部からめしべが延び、おしべの先よりもさらに突き出して5裂する。



写真-11 JR 山陰本線・玄武洞駅近くに咲いていたフヨウ

【参考資料】

- 1 『円山川風土記』 特定非営利活動法人 風土工学デザイン研究所編 平成 19 年
- 2 『ひょうご伝説紀行―神と仏―粟鹿山』 兵庫県立歴史博物館デジタルミュージアム
https://rekihaku.pref.hyogo.lg.jp/digital_museum/legend2/story3/
- 3 『ひょうご伝説紀行―神と仏―五社明神の国造り』 兵庫県立歴史博物館デジタルミュージアム
https://rekihaku.pref.hyogo.lg.jp/digital_museum/legend2/story1/
- 4 『出石神社由緒略記』 但馬国一宮出石神社 HP
<http://www.izushi-jinja.com/booklet.html>
- 5 『城崎大橋架替事業』 兵庫県 HP
<https://web.pref.hyogo.lg.jp/tjk18/documents/1.pdf>
- 6 『来日岳、ホオリ、縄文時代、縄文海進、フヨウ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和 7 (2025) 年 3 月 『ひょうご水百景』 No.218

改訂：令和 8 (2026) 年 8 月 『ひょうご水百景』 No.218